

D82

人間論

小野德吉 著

公德館發行

259
7
1088

序

詞友小野徳吉君、時事遷移の状態に患慨憂憤すること久矣、日露戦役

後、國勢外に揚がるも、國狀之れに伴はさるものあるを覺り、公私力を

特47
912 裁せて、青年會等を組織し、國基を鞏固ならしめんと努む、其組織の治

班を窺ふに、千篇一律なる規約を設け、其形骸を備ふると雖も、之が根
底たるべき人生問題を解決して以て目的を完うするもの尠きを憂ひ、郷

閩の青年を薰陶するを以て自ら慰め且つ樂みとす、其間、東西古哲の金
言を布演し、比喻を近きに蒐え、説く所のものを綜合編纂し、人間論と
題して公刊頒布せんとし、其稿を示さる、繙閲するに、其論述する所の
もの、君が素性を發表し、青年子女の針路を定むる好標的とするに餘り

明治
根
43. 3. 26

因本

ありと信ず、君亦慰め且つ樂み多からん、一讀三歎

明治四十三年三月

辱知 小島 忠 八 識

人間論

序論

小野 徳吉 述

人は何れより來り、何れに向つて往くものなるか、未だ其生を知らず、焉んぞ死を知らん、
とは孔夫子の曰はれし所、疑問の中に生れ、疑問の中に死す、實に千古の疑問、恠しきものは
人生問題である、嘗試に吾人を生みし母親に就いて之れを問ふて見よ、何故子を生み給ひしか
と、母親もこの答辯には苦むだらう、ソコで側に居合せたる八十に餘る祖母さんに聽く、祖
母さんは今更に若い昔が偲はれて、ナル程に前等の生れた頃は、別段子供を欲しいと思つた譯
でもなかつたが、澤山に前等か生れ出で、尼姑の前には氣兼ねし、家族の者にも苦勞をして、
マア一通りの心配ではなかつたぞ、なご、曰ふかも知れん、而し何故に予の身を生み給ひし
かと再び問はるゝに至つては、何故であつたやら解からぬと答ふるより外ないたらう、其八十
の老媪も解り兼ねたる千古の疑問をこゝに解決せんとするのである、難中の難事と曰はねはな
らぬ、しはらくあらゆる方面より之れを歸納して見ましやうか、役所に通ふ役員、學校に出勤

する教師を途に要し、君等は何故に毎日役所に行かるゝか、學校に出てらるゝかと問はゞ、國家の爲めとか教育の爲めとか、種々の答を爲す者もあらふが、歸する所は吾々はかく精勤せざれば、俸給を買つて飯を食ひ妻子を育ふ事が出来ないといふにあるたらう、夏田を耨る百姓を拉して、た前はナゼ斯の炎天に田圃の中に倒しまになりて、汗や泥に丸でドブ鼠になつて田草を取るかと問いたなら、渠はドンな答をしましやうか、必ず吾輩百姓は御覽の通り、星を戴きて野良に出で、月を踏んで家に入り、取り分け燃ゆるが如き炎天には、其炎暑を冒して田草を取らなければ、豊に米を作つて飯を食ふことが出来ないといふたらう、捻り鉢巻の大工に就き、煤に塗みれし屋根葺を呼び、貴公等はナゼ襦袢一枚になり叩き大工をなし、炭團の様になつて屋根葺をするかと問ふて見よ、心ずや左の通り答へるだらう、吾々職人は御覽の通り職に忠實にせなければ、お人様より賃錢を貰けて、米を買ひ味噌を買ひ薪を買つて、妻子を養ふことが出来ないといふ、ボテ擔き商人を尋ね、店守の番頭を訪ふて、ナゼ其様に足を捧にして肩に腫をあて、平蜘蛛の如くにた辭儀をして、五錢や十錢の商に、あらん限りのたせじを振りまくかといふ見よ、ドンナ答をしましやうか、へ、吾々商人は斯くた世辭を述べ、お得意様の機嫌をとらなければ、品物を賣り儲をとつて、活計を立つることが出来ないといふに相違あるまい、偕

此に由て考ひ見れば、役人にせよ、教師にせよ、百姓町人職人にせよ、皆飯を食ひ妻子を養はんか爲めに働いて居ると云ふことになる、然らば人間は食はんか爲めに世に生れ出たと云ふ歸結になる様だ、

○若し人間が食ふ爲めに世に生れ出で、それで萬物の靈なりと威張ることにしたならば、人間よりは餘程活計に上手なものがある、見よ植物は、地下より滋養分を吸ひ、花咲き實生り、人間界の如きし烈き競争もなく、悠々として生長し繁殖する様子は、ナント活計に巧みなものではないか、例へば粟は如何、山の半腹に居宅を下し、思ふ存分滋養を吸ひ、澤山の子を孕み、鋭き針もて之を獲ひ、月滿つれば殻自つと内より破れて、數多の子を地上に生み墜し、滑り々々て谿に出て澤に入らしめ、己れはジツと一地に止まりてありながら、子をして遠く處々に移住し繁殖せしむるのである、之れを人間の或る者か、其日暮しも出来ないくせに、多くの子供をつくり、教育して、業を仕込み職を授け、遠く海外ところか、近き世間に突き出して、自活の道を立つるの術も知らしめず、一家團欒と曰へば誠に結構なれど、親子兄弟ゴタノ、と一所に集り、貧は益々貧に逼り、産を破り家を傾け、顛々困苦する者に比へて見れば、子を育て生を營む點に於いては、粟は餘程人間よりは上手である、更にこれを稻に見る、一粒の種子を田

に下せば、數條の苗となる、一定の場所にたこなくじつとして居りながら、よく食物を地中より取り、ヤレ競争であるの、ソレ競争であるの云ふ騒動もなく、豊に其身を養ひ、一本の枝もよく百數十粒の子を生み、穰々として熟したる其子は、滿天下の人間を養ひ、而して其死骸の藁は、沓を棚ぢ蓆に織りて、人間世界に欠く可がらざる要具となるのである、之れを萬物の靈と自稱する人間の死して、其死骸の遣り所に窮して居るに比するに孰與ぞ、私の家では大切の祖母さんに死なれた、此末ドウしたらよからうなと、兄弟親類死した佛の枕元に集つて、泣いて居るのも束の間で、オヤ嫌な臭が仕はしめた、早くた葬式なと、直ぐに愛想をつかされて、茶毘に附され、土に埋められて仕舞ふ、人間の死骸はドコまでも厄介にせられて居るではないか、猫は如何、多くの兒を育て、一視同仁主義で（マサカ主義もあるまいが）三毛を相續にしようとも、斑毛を係り子にしようとも曰はぬ、これを人間が、姉妹はボンヤリたから相續はさせられぬ、妹は転婆だからた拂ひ箱じや、寧ろ三子を係り子にせようなどの、依估最負沙汰に比べて見れば、猫の心は優美でないか、餘計な話は止として、一体吾人は何故に、斯くまで食物にいやしきかと云ふに、外に六かしい譯でもない、食はねば死ぬからである、然らば食つたら死ぬのか、一定の時限が来れば必ず死ぬ、食つても食はぬても死ぬ、

鹽より鹽にうつる五十年

で、キヤット生れ落つれば鹽の中で産湯を浴せられる、ウンと死るれば復鹽の中で湯灌をされる、其間が僅五十年、七十年は古來稀なりだ、悠久無限の年月に比べて見れば、五十年の壽命は、朝に生れて夕に死ぬ蟬蛸同様ではないか、其五十年も今日では何だか保証が出来兼ねる、世界第一の衛生國と云はる、獨逸の統計によれば、同國人の平均壽命は三十二三年であるそう、勿論生れて直に歿する者もあらう、十才位で歿する者もあらう、又七十八乃至九十百までも長命する者もあらう、これを平均しての三十二三年である、我日本は衛生思想未だ普及して居らぬ、警察の注意は随分行届いて居るが、それでも赤痢病を隠蔽して、隣りから隣りへ傳染さしても、迷惑と思はぬ不心得な者もある、若き婦人の中には半産流産無理算談に、横死する者も少くない、ソコで日本の統計は残念なる哉二十七八年の壽命であるそうだ、古來の通り相場が五十年、今では大に下落して獨逸ですらも三十二三年、日本はよく踏みつけられて悲しい事には二十七八年で閻魔の廳に安賣を爲なければならぬ次第となつた、して見れば吾人は又死ぬ爲めに生れ來たかの様にも思はれる、然らば其死は謹んでた請するから其代り

面影のうつらで年のつもれかし縦ひ命にかきりありとも

でドウか若い十七八の美形で一生を通されまいかなと、曰つた所で、天地の規則に容赦はない時計はカチ／＼と人間の命を刻んでゆく、途中ご偶然舊友に出會する、オヤれ久し振り、何もた變りなくて大慶至極なご、は普通のた定まりである、ナニた變りない所ではござらぬ、斯くまで小野は變つて居ますせ、ナル程小野先生隨分頭も禿けて居るナ、ソリヤ何年の何月何日何時何分からしてソナに頭か禿けはしめたなご、曰はれても、何時から禿けはしめたも分るものではない、予は生れ落つると同時に禿げ初めたなご、ませかいすより外に仕方かないのである、猶餘計な話を又やつた、これより愈々本論に入りて人生問題を解決して見ようと思ふ、食ふて稼いで子供を生みて、偕死ぬると云ふことは、唯人間計りてはない、而かも動植物は其營養繁殖をはかりて、綿々餘裕あることは遠く人間以上である、人生の目的豈かゝる醉生夢死のものならんやだ

本 論

道元禪師曰く

人生得難し佛法遇ふことまれなり

と、蓋し宇宙のもの、森羅萬象其形を異にすれども、其本體に至りては物心の二元に外ならぬ目を開いて見る所のもの之れ物である、目を瞑きて考ふる所のもの之れ心である、乃ち吾人の身心は、直徑三千里周圍一萬餘里の地球と云ふ物質（有限）と、古往今來縦に究極なき時間、上下左右横に際涯なき空間を貫通して、所謂聲もなく臭もなき心靈（無限）より稟受したものである、獨り吾人のみ之れを稟けたのではない、禽獸も草木も瓦石も皆其元素を同うして居る縦しや其元素に多少の異同はあれども、物心の二元に外ならぬ、唯其清濁を異にし、因縁を異にせしより、靈ごなり不靈ごなつたのであら、涅槃經に一切ノ衆生ニハ悉ク佛性アリと云ひ、山川國土悉皆成佛と説かれしも、其本體が同一であると云ふの説明に過ぎない、均しくこれ陶器である、然れども作る因縁の異同により、花瓶ごなり茶碗ごなり水差ごなつた、各其形が別である、随つて其作用も異である、水差には水差の作用があり、茶碗には茶碗の作用があり、花瓶には花瓶の作用がある、花瓶を以て茶碗に代用する事も出来れば、茶碗を以て水差にする譯にも行かぬ、等しく竹ご紙ご糊ごある、傘ごなり提燈ごなり團扇ごなつた、團扇は風を出し、提燈は暗を燭らし、傘は雨を凌ぐのてある、團扇を以て暗を燭らす譯には行かず、提燈を以て雨を凌ぐ役には立たぬ、作る因縁異なれば、其形を異にし其作用を異にするは之に由つて考ひてもわかる、乃ち生る、所の因縁にて、人ごなり馬ごなり牛ごなり猫ごなり杓子ごなり、

各々其形を異にしたるより、其作用は亦天淵の差を生じたのである、本體は悉有佛性でも、其末は斯の如く相違がある、牛馬を見ずやだ、彼の如き偉大なる體軀をうけて生れなから、九尺二間位の隘き囹圄に繋かれて、三度の食餌もホンのあてかび扶持、タマに外へ引き出されて、ヤレ嬉しやと思ふも束の間、重き車を挽かせられる、遠くへ荷物を運はせられる、鞭撻される追ひ廻はさるゝ、十五六才にもなれば驚させられ、役に立たずさせられ、屠兒の手に渡されて終に屠殺されて仕舞ふ、憐れなものではないか、佛家の諺に牛馬の前身は横着な貧乏人である借金を踏み倒して、散々金主を苦しめたる罪は今生に報いきて、牛馬とまで生れ下り、一生人間の爲めに勞役しても、尙前世の借金を返しきれず、身死して肉まで人間に捧げ、はしめて返濟の義務を了ると云ふことであるが、説の當否は兎に角として、本來同じ佛性でありながら牛馬の如き哀れな境遇に生るゝものもある中に、吾人は人間に生るゝことが出来たのである、何たる幸ぞ、道元禪師の人生得難シと曰はれしは偶然のごてはない、其得難き人間に生を稟けしばかりではない、吾人はまた遇ひ難きの佛法に遇ひ居るてはないか、同じ人間でありながら、南洋諸島の蠻族に於けるが如き、若しくは臺灣の生蕃如きの中に吾人が生れたらばどうであらう、年中攻殺を事とし、人を屠り首を截するを以て無上の樂となし、肝を其ひ肉を脯にし、今日は他族を屠り、明日は我身を屠らるゝ、何して學問を爲るの向上を圖るのなどの話でない、全然禽獸にも劣る境涯に居らねはならぬことであらう、然るに吾人は遇ひ難きの佛法に遇ひ、道理の明なる社會に棲み、仁政の下に立ち、文明の恩に浴し、煦々皞々として人生の快樂を享け居るてはないか、吾人は大に之を感謝しなくてはなりません、感謝すると同時に其佛性を擴めて究竟の所に達するは吾人の義務ではあるまいか、孔子は曰く

朝に道を聞けば夕に死すとも可なり

孟子は曰く

人の道ある飽食煖衣逸居して教なければ禽獸に近し

と聖賢の曰はるゝ所は符節を合するか如しである、聖賢の意を推せば、吾人は人たる所以の道を聞き、且其道を行はんが爲めに働くこと云ふ歸結を得ることになる、孟子は又曰く

人の禽獸に異なる所以のものは幾希なり庶民之を去り君子は之を存す

と、幾希をホトントマレナリと訓んてはいけない、幾希は老子の所謂之レヲ視テ見ズ、名ケテ夷ト謂ヒ之レヲ聽イテ聞エズ、名ケテ希ト謂フの夷希と同じく、神靈と云ふことである、乃ち庶物の原理……宇宙の精神を幾希と云ふのである、人の禽獸と異なる所以のものな幾希乃ち宇宙

の精神を體するからて、其幾希が無かつたならば、并は人間でない、折角天賦のこの幾希を庶民は打去て、省みない、自ら禽獸の仲間人をして愧ちとも思はない、唯君子か之れを存するばかりだと孟子は曰はれてある、易の文言傳に

大人は天地と其徳を合せ、日月と其明を合せ、四時と其序を合せ、鬼神と其吉凶を合すとある、吾人は大人君子ではなけれども、此幾希を存して、天地と其徳を合せ、日月と其明を合する境涯に到りたいものである、中根東里は曰く

人は天地の心なり、天地は人の身なり

と、名言である、吾人は天地の心にして、天地は吾人の身であるならば、天に代りて天意を行ふのは人間畢生の目的である、南洋諸島には五千年を經過したる樹木がありと聞く、梢は天に高く百二十間もあるそうナ、其樹木は今後尙幾百千年の壽命を保つかも知れないのである、今日までが既に五千年ではないか、五千年の長壽に百二十間の大軀を持ちて、社會に對して何等の貢献をしたか、只花を開き實を結ぶ位に止まつて居る、豹の美は皮にあり、孔雀の美は羽毛にあり、櫻の美は花にあり、禽獸草木各一部分の美を發揮すれども、天に代りて天意を行ひ宇宙全体の大精神を發揮するものは、人間を措いて他に求むることか出来ないのである、子思

は曰く

誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なり

花は春に咲き、紅葉は秋に散り、雷は夏に鳴り、雪は冬に降り、鳶飛て天に戻り、魚淵に躍る天の道には嘘偽りが無い、ドコまでも誠である、其誠を身に體して、五尺五十年の間に之れを發現するのが人の道である、故に釋伽は

道を行ふものは之れ如來なり

と曰はれた、如來様といへば、た寺の須彌壇か家の佛壇に飾られてあるかに思ふのが普通なれど、アレは本統の如來様ではない、單に如來の寫眞に過ぎないのである、如來即ち佛の本體は三世十方に遍在せる常住三寶の体用と申せば大層六ヶしいが、ツマリ宇宙の大眞理にして、之れを法身の佛と云ふのである、元より法身であるから、目見る可からず、耳聞く可からず、子思の聲モナク臭モナシ至レル哉と、讚嘆せられたのが其れじや、止むを得ないから先覺者は眞寫眞とても云ふ様なものに象りて、た寺に据ひられてあるのが普通に如來様として信せられてある、正眞正銘の如來様を見たいとならば、天に代りて天意を行ふ人……人の人たる所以の道を行ふ人……宇宙の大精神を實際に行ふ人を見るかよい、乃ち本統の如來である、應身の佛

である、コハ獨り釋伽の曰はるゝはかりてはない、孔子も亦

博く民に施して衆を濟ふものは聖なり

と曰はれた、聖も如來も、佛も仁者も儒佛両家の名稱の異なるはかりで、其實は同一である、乃ち博く施して衆を濟ふは聖人である孔子は曰はれた、一体何を施してト云ふ工合に濟ふのであらうかといふに、た互は天地精純の氣を稟けて、万物の靈五行の秀など、自負し居りながら、自分の本家本元を忘れ、何れより來り、何れに向つて往くものなるを知らず、名利の巷に迷ひ、物欲の奴隷となり、親鸞の所謂菩提ノ鹿ハ招ゲトモ來ラズ、煩腦ノ大ハ追ヒドモ去ラズで、滔々たる天下舉げて自暴自棄の悲境に淪み居る、其哀れなる衆民に知徳を施與して、苦境より救ひ出すを、聖も佛も仁者も如來も云ふので、子思は其濟ひ出す手段をは教と曰はれてある、故に中庸に

天の命する之を性と謂ひ、性に率ふ之を道と謂ひ、道を修むる之を教と謂ふ

とある、天の誠に則りて、人道を立つるのが教で、孟子の教無ケレバ禽獸ニ近シの教も、性に率ふの道を教ふる教も、別に異りはない、茲に至つて釋伽の佛教も、孔子の儒教も、毫も異りのないことは疑ひのないことである、大學に

大學の道は明德を明にするにあり、民を親にするにあり、至善に止まるにあり

とある、孔子が宇宙の大原理を道破せられたことは、此一章で充分だ、大學の道とは、大人の學又は大學校の教など、見たるは古來の解釋なれども、予は之を人間究竟の目的と解釋する、明德を明にするとは、天の誠を身に體し、天に代りて天徳を立て、人の人たる所以の道を圓滿具備することである、民を親にするとは、己の具備せし天の誠を人に傳ひ、人をして、人の人たる所以の道を圓滿具備せしむることである、已れも天意人道を行ひ、人にも天意人道を行はしめて、茲に始めて至善の境涯を作ることが出来る、釋伽は曰く

衆生は長く三界に眠る、佛は道眼既に開けて、自ら覺め、他を覺めしむ

と、佛とは印度の原語にして譯すれば覺の字になる、其の覺といふことに就いて、自覺と覺他と覺行圓滿との三義を含むと云ふのか道義であるが、其自覺といふことは、自分が宇宙の眞理を悟るといふことで、其方法即ち悟りを開く修行をすることを自利といふ、自利とは大無量壽經に説かれてある、眞實の利で、自分勝手の利益のことでは無い、即ち吾人が人生最終の目的を達し得たる所に名けられたのである、其覺他といふことは、自分が宇宙の眞理を悟つた通りに、必ず多くの他人を悟らすことで、其方法手段をめぐらすことを利他の行といふのである

此自覺と覺他、即ち自分も悟り、且つ他人をも悟らせることの圓滿究極に達したるを即ち覺行
 充滿といふので、其人を名けて印度の原語で佛といふのである、孔子の明明徳親民と、釋迦の
 自覺覺他が、かくまで其歸趣を同うするは實に驚嘆に堪えますまい、聖佛の教がかく一致する
 計りてはない、た互五千萬人民が日々夜々に奉戴して、寐ても寤めても忘るゝことのならぬ、
 教育勅語の中にも、明明徳親民、自覺覺他の人生究竟の目的なることを拜見し奉ることを得る
 のである、申すまでもなく教育勅語は、忠孝を基礎とせられてあるが、其の第二段の十五項目
 を通して一貫しある所の道理は

恭儉己を持し、博愛衆に及ぼす

の二句に在りと拜察し奉る、其の恭儉博愛と、明明徳親民、己を持し衆に及ぼすと、自覺覺他、
 ドー拜見しても其歸趣を同うして寸分相違ないと申すより外はない、尙委しく話して見まし
 やうか、恭は肅なり敬なりと註する字で、ウヤ／＼シイと云ふことである、儉は節儉だの儉約
 たのど續く字で、物事のツマヤカに無駄のないことである、一口にいへはた互の行狀に不行
 義不作法な無駄な行ひのないことである、一口に不行義不作法なムダな行ひを爲ぬといへば誠
 に容易な様に思はるれど、吾人が日々夜々の行ひ、實際其通りに不行義無作法なムダな行ひが

なかつたならば、其れで聖人も佛も神も申すことができるのである、翻つて天地萬物を
 見よ、何物か行義作法の正しからざるものがある、千古萬古太陽は大陽たるの徳を守りて、温
 むへきを温め照らすへきを照らして居り、月は月たるの分を持して、虧けへき時に虧け盈つへ
 き時に盈つ、洵に行義作法の正しい姿である、怪我にも太陽が朝寢をしたといふこともなけれ
 ば晝寢をしたといふこともない、又寒中に土用三伏の熱を放ち、又は夜中に照り出したといふ
 様なムダな行ひもない、火は火の様に焼くといふ性を失はず、水は水の様に濡らすといふ徳を
 失はぬ、花は花の分を守りて春に咲き、咲くべき時節が来れば谷間の岩の狭間の躑躅も咲き、
 紅葉は紅葉の徳を持して秋に散り、散るべき時節が来れば深山の奥の紅葉も散れる、世がハイ
 カラになつたからとて五輪の梅の花は六輪に咲きもせず、贅澤が流行すればとて紅葉は紫にな
 りもせず、洵に行義作法が正しくムダな行はしない、吾人の身体もそうてはないか、頭は頭の
 様に上を持し、脚は脚の様に下を支え、手は手の様に保持の任をつとめ、目は見れとも聴くこ
 とはせず、耳は聴けとも臭ひは嗅かぬ、肺は呼吸すれとも消化はせず、胃は消化すれとも呼吸
 はせぬ、いかにも恭儉己を持するのすかたでないか、其己を持するといふことも一通り話をせ
 にやならぬ、己の金錢己の財産は盜賊に逢へば更に價値なく、己の家藏は火事に罹れば何の權利

もない、己の田地も洪水には浚らはれ、己の山林も噴火には埋没される、己の性命己の體と力
 んた所で、一朝無常の風が吹き來ればイヤでもオウでも閻魔の廳に行かねはならぬ、然らば其
 己を持つるといふことは何てあらうか、少しく方面を換へて誰かに向つて汝は何ものであるか
 と問ふて見よ、極端なる答にはオ、オレか我は人間じやと答へるであらう、ア、其人間じやと
 いふ所に味がある、人間ならば實際人間らしき性徳を具ひ、人間らしき行をせにやならぬ、我
 は貴顯である紳士であると威張つた所で、人間らしき行ひをせなかつたならば、人間である
 はゆるされぬ、其人間たるの徳を持って放さぬのか己を持つるといふのである、乃ち孔子の所
 謂君ハ君タリ臣ハ臣タリ父ハ父タリ子ハ子タリの徳で、君には君たるの徳あり、臣には臣たる
 の徳あり、父子には父子たるの徳ありて、其君臣父子たるの徳をば人間の徳といふのである、
 この徳は上 天皇陛下に於かせられても別段増すといふこともなく、下人民じやからとて減る
 と云ふこともない、盜賊も之れを奪ひ取ることもできざれば、火事も焼くことが出來ない、乃
 至洪水も地震も雷もこの徳ばかりは如何ともすることが出來ないのである、忠義は楠公の徳
 ある、尊氏は楠公の一族を湊川に塵にしたか、楠公の忠義に至りては、寸毫も傷ることかでき
 ない、室町十三代の榮華は漸盡灰滅して跡方もなきに引き換へて、楠公の忠義は日月と光輝を
 争ふて居る、故に教育勅語の結句に

朕爾臣民と俱に拳々服膺して咸其徳を一にせんことを庶幾ふ

と仰せられてあるてはないか、偕又博愛衆に及ほすの聖語は、深く拜講するまでもない、恭儉
 己を持つるの徳を其身に行ふことができたならば、之を他人に教へ施して其れをして我と同じ
 く恭儉己を持せしむるのが、取りも直さず博愛衆に及ほすじや、博愛の文字は猶いろく應
 用せらるれども其骨子は今申した所にあると予は思ふ、爰に至つて孔子の明明徳親民と釋伽の
 自覺覺他とは、教育勅語の御精神と相一致したることは明々白々の道理である、乃ち我 天皇
 陛下に於かせられても、吾人々生の目的は恭儉己を持し博愛衆に及ほすデ、不行義不法なム
 ぐな行ひがなく、人間の人間たる徳を自ら行ひ他にも實行さするのだと仰せらるゝことである
 まして 天皇陛下は時間的には之を古今ニ通ジテ謬ラズ、空間的には之ヲ中外ニ施シテ悖ラズ
 と御証明あらせ給ひしにして見ては、實に感佩し奉ることではないか

補論

○既に人生の目的を解決し得ましたから、吾人相互はこの目的に向つて進み、この目的を遂げ
 なければならぬのである、世には醉生夢死と謂つて、尊い人間に生れなから、其生れたる所以

も知らず、夢幻の如くに一生を送つて、牛馬と共に朽ち果て、悔ゆることを知らぬ人がある中には非常に常識に富み、自らは新聞の雑報すら讀むことの出来ぬ無學な人でも、人に讀ませる其の道理をき、わけて、事を處理して駢引に抜目がなく、巨萬の富をつくりて、紳士と仰かれ紳商と呼ばれて居るものがある、然れども人生の何たる最貴重の問題を解決し得ぬ悲しさには、禽獸の行ひをして、猶悟として愧ぢとも思はぬ、彼の家には立派な本妻がありながら、其本妻を泣かせておいて、妾狂ひなどをするものはたもにこの連中に多い、哀れなりとも氣の毒とも云ひ様がない、孔子は

人の生るゝや直なり、之を罔くして生き居るは幸にして免るゝのみ
 と曰はれた、尤なことである、人間は生れなからにして、天命を稟けて……宇宙の眞理を身に體して、人の人たる所以の道を行ふべき原種を享有して居るのである、其れをば直といふのだ其の原種を自分から打捨て、顧みず、人の人たる所以を喪失して、牛馬の仲間入りをして猶人間らしき顔をなし居るは僥倖にして亡滅を免るゝのたと孔子は曰はれたのである、
 ○天下は廣く人多しと雖も、天の誠を體して人の道を行ふもの果して幾人ありましやう、寥寥として曉天の星の如くではありますまいか、由て來し所を知らず又往きさる方向も知らず、恰

も茫々なる曠野に彷徨して、其方向に迷ひ居るは、今日上下一般の状態である、政治家にせよ實業家にせよ、教育家にせよ、學者にせよ、役者にせよ、藝者にせよ、根本の原理を忘れて末技末節に拘泥し、水に泛べる浮草か、曠野に彷徨ふ迷ひ兒か、前に行き後に戻り、右に漂ひ左に流れ漂々乎として其止まる所を知らぬとはナンと氣の毒な次第ではあるまいか、政治家を見よ、桂侯も手探りなれば、西園寺侯も手探りである、政友會も手さぐりなれば、進歩黨も手さぐりである、官僚派と云ひ純民黨と云ふ、総ての黨派あらゆる議員皆手さぐりである、何一ツとして一定の方針に進み行くものはない、其れも其等此等の人々に、天の誠たの人の道だのもあつたものでない、日糖事件を見ずやだ、多大の賄賂に目がくらみ、醜を百世に貽したる如きは彼等の心情を暴露したる好標本である、我國は斯の如き醜類に、美服を着け高帽を冠らせて、紳士となし豪傑としてゐる、嘆く可きの極ではないか、何卒して彼等に一點の曙光を認めしめ無明の曠野を出で、煩腦の苦海を脱かれしめて、慰安の岸に導きたいものである、誰やらの歌に

善き人に向へは我も身を愧ちて人こそ人の鑑なりげれ

とある、善き人を以て鑑とするより結構なことはない、故に孔子は其教を布かるゝにも抽象的

に二帝三王の道或は單に先王の道と説かれたが、之れを具体的に標準を示されなくては、一般の人には分らない、ソコで堯舜の道又は文武周公の道と具体的に示されてある、特に周公は孔子の理想の人であつたらしい、

甚しい哉吾又夢に周公を見ず

と曰はれしに徴して見ても、孔子が如何に周公を慕はれしかを想ふことが出来る、孟子は孔子を理想の人となし、孔子たらんと欲せられた人である、故に

願ふ所は孔子を學ばん

と曰ひ

吾れ未に孔子の徒たることを得ず、私に以て人に淑くす

など、曰はれしに就いて見ても孟子は孔子を理想とし第二の孔子を以て任せられた人である、釋伽は具体的に大日如來を立て、阿彌陀如來を立て、觀世音菩薩を立て、一切衆生の理想の標準となし、衆生の行爲をして之れに冥合せしめんとせられたのである、固より吾人の本体は宇宙の真理……大日如來……阿彌陀如來、觀世音菩薩の分身であるから、茲に大なる決心を以て釋伽の所謂菩提の知恵を以て進み行かんには、本体と冥合せられぬことはない筈である、子は

親の分身であるから、親の様にならぬことはない譯である、唯賢愚利鈍の差があるより、聖佛の如く、生れながらにして知り、安んじて行ふことはできまいとうしても、學びて苦しみて利して勉強して、之を知り之を行ふことができるのである、ツケても理想とする所……標準とする所がなければならぬ、孔子は堯舜や周公を理想となし、孟子は孔子を理想となし、釋伽は大日や阿彌陀や觀世音を理想とせられたのである、乃ち客觀的理想の本体を立て、主觀的理想の本体をして、これに冥合せしめんとしたる所以は、聖賢佛陀も同様である、キリストとてもこれに異りはないだらうと思ふ、獨一眞神を理想の本体となし、神の子たる吾々をして、其理想の眞神に冥合せんことを教へられたに相違ない、されば吾人は聖賢佛陀の教に従つて、客觀的理想の本体を立て、自己の主觀的理想の本体をして、客觀的理想の標準に向ひ進ましめ、其主觀と客觀とを融會冥合せしめなければならぬ、其融會冥合する所に倫理道德乃ち人たる道の規則がある、サア斯うなることドーしても標準とする本尊様を立てねばならぬ、予は其本尊様として孔子を立て釋伽を立てキリストを立て、居る、この三聖は宇宙真理の本体を代表された方である、圓滿具備欠くる所のない人である、神、聖人、佛陀より以上の立派なる名稱あちば此三聖人に奉りたいのである、さて斯三聖を理想の本体とした所で、容易に其足元に至らるゝ

ものではない、唯三聖の眞似をするといふことを心に忘れない様にするがよい、三聖の居らるゝ處は假りに吾人の住所より一萬里の遠きにあるものとするれば、其れに向つて十里進みても眞似である、五里進みても眞似である、一里踏み出しても一步踏み出しても眞似である、其方に向いたはかりても矢張眞似に相違ない、釋迦何人ぞ孔子何人ぞキリスト何人ぞ、彼も人なり我も人なり、我れ笑ぞ彼たらざるを得んやで、勇往邁進三聖の壘を摩せんとする者は哲學者である、退いて虚心閉目、心界に三聖を現するものは宗教家である、故に宗教家よりは學者はど氣毒なる者はなく、學者よりは宗教家はど阿呆らしき者はなく見ゆるのである、哲學者は向上的に理想界に達せんとし、宗教家は向下的に心裏に理想界を現するので、其慰安の道を得るに至つては同一である、決して氣の毒にもあらず、阿呆にもあらずだ

○諸れを哲學的に研究して安心すると、諸れを宗教的に信向して決定することを問はず、宇宙の眞理を自覺し、人生の山來歸趣を知るものは、光風霽月心界に盈ち、悠々として自適し、嬉々として楽しみ、所謂心廣く体胖かなりである、彼權勢に驅られ利慾に眩するものは、煩悶の上にも煩悶し、苦惱に苦惱を重ねて、人生の不如意を嘆し、或は不可解を以て華嚴瀑に沈み、或は厭世を以て淺間の火坑に投する如き悲境に陥るのである、疏食ヲ飯ヒ水ヲ呑ミ脰ヲ曲ゲテ之ヲ

枕トヌルモ樂ミ其中ニアリとは其優游自適の状態を聖人の洩らされた言である、一簞の食一瓢の飲、陋巷に窮居して、其樂を改めざりしも、亞聖の綽々として餘裕を示されたのである、仁遠からんや、吾れ仁を欲すれば斯に仁至る

と孔子は曰はれてある、相互の精神裏に宇宙の眞理が縮寫されてあるてはないか、天上天下唯我獨尊は釋伽に限つた譯はない、相互が皆天上天下唯我獨尊だ、之ヲ用キレハ則行ヒ、之ヲ舍レバ則藏ル、何の苦惱もある筈はない、何の煩悶もある筈はない、吾レ仁ヲ欲スレハ斯ニ仁至ル進みて賢を隱さる柳下惠ともなるを得べく、退いて汗れざる伯夷の清を守ることでも得べし、煩悶と解脱と、唯其覺不覺……迷と悟との差あるのみである、悟れは深山の奥に炭焼く賤夫と雖も優游樂しむことがてきる、悟らざれば金殿玉樓に綺羅錦繡をまこふ貴婦人も煩悶を免かれない、思ひ内ニアル者ハ龍華ノ三會ニ逢フト雖モ凡夫出離ノ直路ヲ知ラズ、覺メテ又悟ルモノハ虎穴龍潭ニ在リト雖モ瑜伽成就ノ快樂多シで、迷あるものは大善知識の側に在るも煩悶を免かれず、悟れるものは虎伏す野邊龍棲む淵の澁りに在るも、安心を得るのである、程子曰ふ

之を放ては六合に彌り、之を卷けは退いて密に藏る

と、大公呂尙は之を商紂に藏めて周武に放ち、諸葛武侯は之を隆中に藏めて天下三分の策に放ち、聖賢は仕官に絶ちて之を春秋に披瀝し、之を浩然の氣に發揮されたのである、之を我朝にしては和氣公の妖僧を挫きたるも、菅公の藤氏に對峙したるも、時宗の元寇を殲したるも、楠公の義を擧げたるも、宇宙真理の發現に外ならぬのである、而して板垣伯は、板垣ハ死ストモ自由ハ死セズと曰つた、名言である、自由は宇宙真理は政治上に發現したる……聖賢の所謂仁義である、佛陀の所謂慈悲である、板垣退助其人は刺客の手に斃るゝも、自由の死すべき筈はない、河野議長は之を奉答文に發揮し、廣瀬中佐は之を旅順の閉塞に傾け、橋中佐は之を首山の敵壘に濺いだるのである

○借問す、前途洋々として、海の如き希望を懐ける青年諸子は、之れを那の方面に發揮せられますか (了)

明治四十三年三月二十日印刷

明治四十三年三月廿二日發行

(定價 八錢)

福島縣河沼郡勝常村大字三川字二城乙十四番地

編輯兼發行人 小野徳吉

全縣 若松市上一ノ町十八番地

印刷人 佐藤八四郎

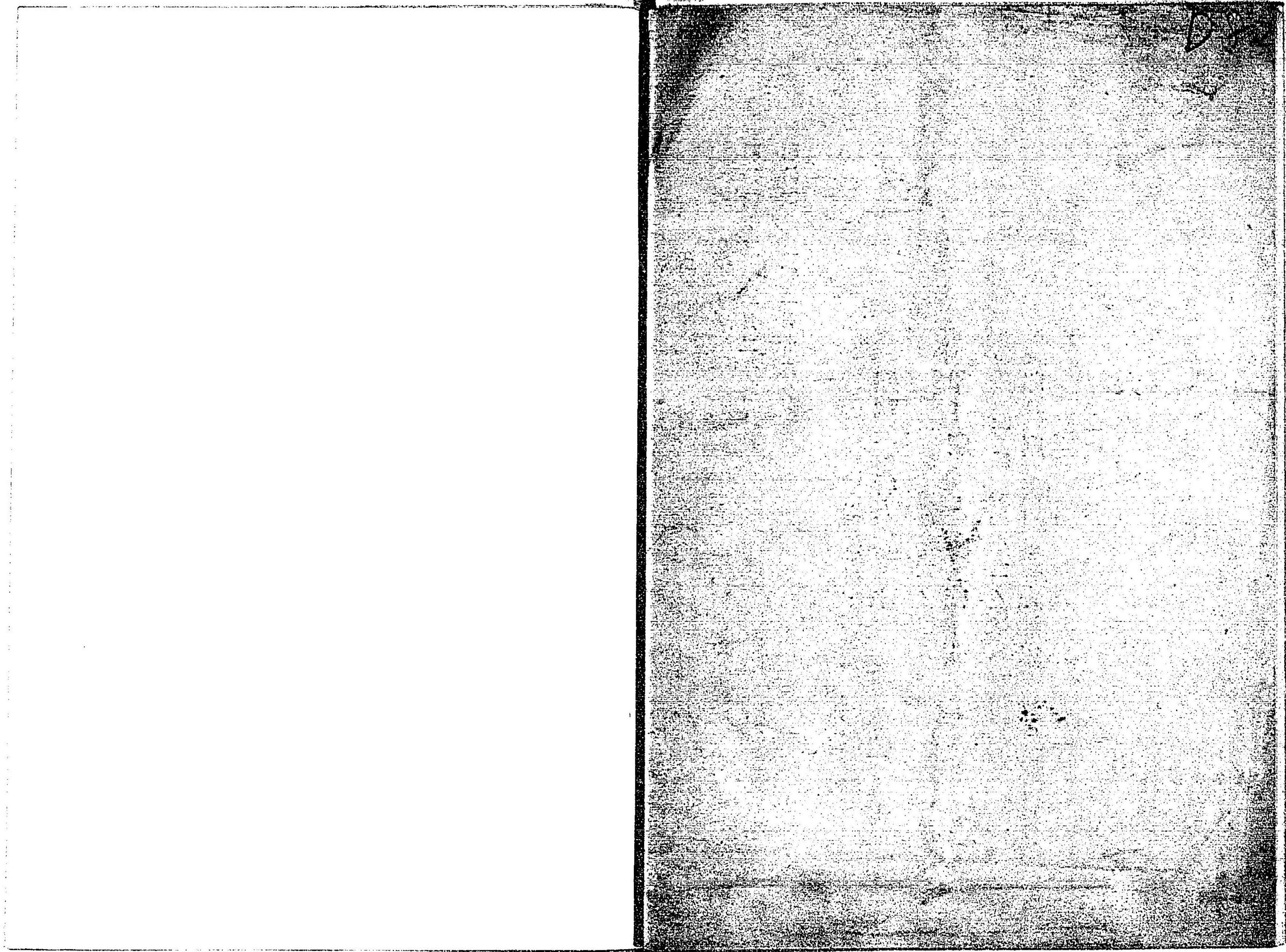
全縣 若松市上一ノ町十八番地

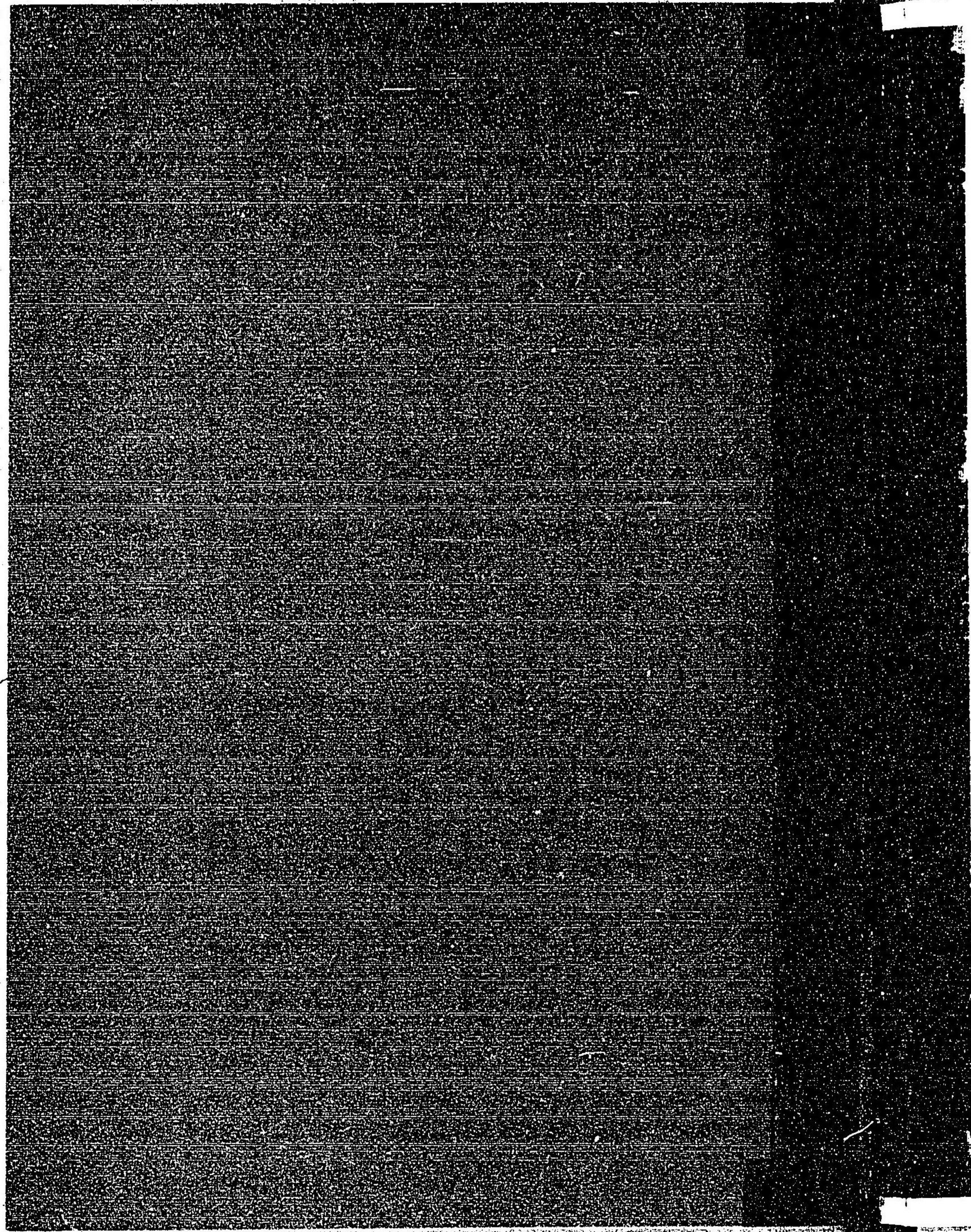
印刷所 丸家活版所

全縣 若松市融通寺町

大賣捌所 山寺昇山堂







47

2

人間論

小野徳吉

国立国会図書館

011224-000-7

特47-912

人間論

小野 徳吉/述

M43

AAE-2870



特

9

